平成 24 年度採択 申請区分 I ③ 東京医科歯科大学

「東南アジア医療・歯科医療ネットワークの構築を目指した大学間交流プログラム」

●相手大学・機関

チュラロンコン大学（タイ）、シーナカリンウィロート大学（タイ）、
インドネシア大学（インドネシア）、ホーチミン医科薬科大学（ベトナム）、
メルボルン大学（オーストラリア）

●主な活動内容（概要）

東京医科歯科大学では、上記相手大学とコンソーシアムを形成し、大学間交流を通して東南アジアにおける医療・歯科医療ネットワークを構築することを目指した学生交流プログラムを実施している。

平成 26 年度は「国際医歯学研究プログラム」において、本学の学部学生 3 名が 5 カ月間タイで医学研究の指導を受け、タイの医学部学生 4 名が 1 カ月間本学で医歯学研究の指導を受けた。「国際医療・歯科医療研修プログラム」では、学生 47 名（学部 35 名、大学院 12 名）をタイ・インドネシア・ベトナム・オーストラリアの 4 ヶ国に派遣し、現地教員の協力のもと、派遣先大学だけでなく、さまざまな地域保健医療現場における臨床研修プログラムに参加した。

海外からは学生 38 名（学部 36 名、大学院生 2 名）を本学に受け入れた。このうちタイ・インドネシア・ベトナムからの計 30 名の歯学部生については、2 週間同時期に本学に受入れ、小グループでの基礎・臨床分野における研修、歯型彫刻やワイヤーベンディング等の共通の歯科技術を競うコンテスト、歯科関連企業の見学、国際シンポジウム、文化交流プログラム等の多国間交流を行った。さらに、今年度は、本学学生および海外学生が、自国の大学においてカリキュラムの一貫として行った自身の研究について英語で口演発表し、コンペティションを行うリサーチデーを追加した。基礎から臨床分野にわたる様々な研究内容について活発な質疑応答が行われた。

平成 26 年度はグローバルリトリートをインドネシアで実施し、日本、インドネシア、タイの学生・教職員 32 名が寝食を共にし、ワークショップや文化交流等を行った。参加学生はお互いに刺激を受け、将来の進路についても考える良い機会になった。同世代の学生たちが楽しく国際交流を行うことは、関係の継続性につながり、将来の医療ネットワークの構築に結びつくと考えられる。

本学では、学生の派遣や受入時には、テレビ会議システムを通して事前に情報交換、共有を行い、十分な準備や必要な対策をとっている。また、3 カ国の教員と本学の教員が、医歯学領域の学生に相応しい国際交流プログラムの内容・方法について協議を重ね、外部評価委員の助言をもとにプログラムの内容改善に努めている。学術交流推進のために、本学の大学院講義を海外相手大学にテレビ会議システムを活用して同時中継で配信する機会を増やしている。今後は、国内の他大学と連携して交流プログラムを実施することで国内におけるネットワークも固め、医療・歯科医療ネットワークの構築とさらなる拡充を目指す予定である。

●プログラムの現状・課題、成功事例

(単位互換、危機管理、寮・奨学金、その他プログラムをつくる上での障害等)

現状・課題

1. 補助金の大幅な削減による影響

補助金額が年々大幅に減額されているので、採択時に予定した計画を実施していくのに支障がでている。

2. 単位認定制度

海外の一部の大学では、学部や学年により単位認定制度が導入された実績はあるが、すべての大学において単位認定制度はまだ導入されていない。

3. 派遣希望学生の減少

平成 25 年度のタイの政情不安の際は、学生の派遣中止、途中帰国などの対応を取った。学生や保護者の中にはタイへの派遣を不安に思う者もあり、平成 26 年度はタイへの派遣希望学生数が減少した。

成功事例

1. 各大学による学生国際交流活動の報告書の作成と情報共有

海外の歯学部学生を同時期に本学に受け入れる歯科研修プログラムでは、平成 26 年度より、本学を含む参加大学 5 校がそれぞれに報告書を作成して情報を共有することになった。海外の大学はこの英語の報告書を学生の国際交流活動の広報ツールとして、自国だけでなく周辺国にも提示しているので、東南アジアにおいて本学の国際的認知度が高まるのが期待できる。

2. 本学における大学院生向け講義（英語）のベトナム同時中継

ホーチミン医科薬科大学大学院では本学のような体系的な大学院講義がない。そのため、臨床、基礎分野に関する本学の大学院講義を聴講したいというニーズは高い。ホーチミン医科薬科大学からの強い希望もあり、平成 26 年度より本学大学院の正規カリキュラムのひとつである大学院講義をテレビ会議システムによって同時中継した。最先端の基礎研究や臨床に関する情報を共有することで、ベトナム人学生の日本の大学院進学や将来の共同研究が期待できる。

●学生交流数

	平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績(※)
受 入	—	—	10	25	21	36	25	38
派 遣	—	—	18	19	36	57	40	47

(※) 予定含む